

## 事業の背景・目的

国内希少野生動植物種ヤツガタケキンポウゲは、本州中部山岳の八ヶ岳の固有種であるが、自生地が極めて限定的で個体数も少なく、集団の存続が危惧される状態にある。その存続危険性の主要因としては、こうした産地極限に加えて、近年ニホンジカの食害影響が顕著となっている。そのため、本事業では、ヤツガタケキンポウゲ野生個体群の消失を緊急措置的に防ぐとともに、今後の保護増殖に向けて本種の分布情報・生態学的特性など基礎情報を収集する。



## 事業の内容

### ヤツガタケキンポウゲ分布状況等調査事業

本種の残存集団・個体の分布、生育状況、ニホンジカ採食圧について現地調査により確認した。既知の生育地周辺における地上調査にあわせて、無人航空機（ドローン）を用いて生育地内及び周辺を観察した。

また、残存個体の遺伝的多様性について、集団遺伝学的解析を行い、適切な現地での防鹿柵の配置計画を検討した。

左図：ヤツガタケキンポウゲ生育地の探索・撮影に用いたドローン（DJI MAVIC 2 Pro）  
右図：ヤツガタケキンポウゲ群落の植生調査実施状況（1m×1m）



## 得られた成果

ドローンも活用し、本種の残存集団・個体を確認した。調査の結果、残存集団は1地点のみで地上部と岩壁上の集団に分かれており、計約100個体（地上：約50個体、岩壁上：約50個体）の開花個体を確認された。地上生の群落内や周辺では、ニホンジカによる採食痕跡や多数のシカの糞、踏跡が確認され、ニホンジカ採食による地上部の群落の存続危険性が極めて高いことが確認された。

分布状況等調査で確認された残存集団のうち、ニホンジカ食害が懸念される地上部の集団は、約10m×5m程度の範囲に限定的に生育していた。緊急的な保全対策として、この範囲を囲む小規模な防鹿柵の設置が適当と判断された。

